
サスケにひょーい!!

サスケン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サスケにひょーい！！

【Zコード】

Z0371R

【作者名】

サスケン

【あらすじ】

サスケに憑依！

能力は無敵！チート？何それ美味しいの？な状態。

しかし、何故かハーレムにはならない！

いいもん！俺は一人の女を愛すのさ b yサスケ

主人公は完全チート・既に万華鏡を開眼+移植済・血継限界をパクるという荒業の三つが成り立っています

第一話（前書き）

警告

サスケがキャラ崩壊しています。
チートです。マダラでも手が出せません、しかし原作にはあまり関
わりません。

原作サスケの場所には別のうちはが入る予定です。
それでも構わない！と言つ方のみ閲覧してください。

第一話

サスケ0歳の時

「生まれたぞ、ミミドリの子が私たちの一人目の子だ

「ええ、イタチの様に立派な忍になってくれますでしょう、なんたつて私たちの子なんですか？」

「ああ、きっと俺たちみたいな立派な忍になってくれるわ。この子の名前はサスケだ、うちはサスケ。イタチと共に里を護る存在になってくれるはずだ」

「ええ、そうね……。それと、少し疲れたから私は寝るわ。イタチにも伝えてあげてね？」

あの子、表情には出していなかつたけど、弟が出来るつて聞いてずっとソワソワしてたから

「分かった、イタチには俺が伝えておく。お前は安心して寝ついてくれ。サスケを運で体力も減つてているだろうからな」

”神波 尚”改め、”うちはサスケ”です。

年齢は0歳、転生者でしゅ！能力はめだかボックスの異常と過負荷を能力としてもらい、ついでに”とある魔術の禁書目録”的超能力をレベル5でもらいました

これで俺TUEEEEEL!!!!したり、女を囮つてハーレムエンドを目指したいと思います

サスケ3歳の時

只今、チャクラコントロールの練習中です。

父さんと母さんがいない間を見計らつて、家の庭の池の上を歩く。

成功……した！実はかれこれ3時間の間こねばつかりやっていたのだ！

原作だとナルトが五行解印をされた後に一発で成功させてたけどあり得ねえよ……。

イメージ豊富な元日本人でも3時間つてキツ過ぎだろ！
まあナルトはその前に木登りやつてたし……そう考えると流石はサスケのチートボディ。

「サスケ……？」

「兄さん……つむづむー。」咲みつー助けてえ……」

見つかつたあー！イタチ兄さんに見つかつたー！

まあ兄さんは俺に甘いし、原作だと俺と里とで俺を重要視したほどだからな、

うん、黙ってくれるはずだ、信じよう。

そして、連れられ連れられ父さんの書斎。

あるエー？なんで父さんの書斎？内緒にしてくれるよね、ねえ！

「あのー……何で俺ここに連れてこられたんですかねえ？
出来たら今の中緒にしてもらいたいな……って思つてるんですけど……」

「駄目だ、実を語つと父さんにサスケの行動が最近変だと聞いてな、少しお前の様子を見ていたんだよ。

そしてお前の事を観察していたら、いきなり池に沈んでは起き上がりを3時間も繰り返していたからな。

そしたら水面歩行の業を会得していたと来たらそれはもう驚いてな。この喜びを父さんや母さんにも味わつてもらいたいと思つてな

「こりないよ、兄さん！つてかマジで勘弁してくれださー……。
父さんにバレたらなんか言われそうで怖いんだけど」

「心配するな、父さんも喜んで術を教えてくれるかもしれないぞ？ 態々チャクラコントロールを練習してることはずしたい術でもあるんだろ？ 父さんなら大体の術を知っているし教えてもらえると思つぞ？ 強くなるに越したことはないからな」

「で、イタチはお前が水面歩行の業を成功させたと言つているんだがそれは本当なのか？」

家族会議開始

「まあ……成功したといつちやあしましたけど……」

「凄いわサスケ、流石ね。他にも何かできるの？ 例えば……『写輪眼とか？』

「……ナンノコトデスカネー？ オレハシャリンガンナンテツカエナ

イヨー、HAHAHA!!!

「 「 「…………」「」

これが完璧な擬態！

ていうか、俺が悪いんじゃないよ？あれだよ、”完成”の性質が問題あるんだよ。

なんなの？父さんの[彌輪眼]を一回見ただけで使えるようになるって？可笑しいんじゃないの？よくよく考えてみたら水面歩行の業もよく考えたら誰かがやったのを見たら可能なんだろうね。なんか軽く鬱になつて來た……

「で、何処まで使えるんだ？[彌輪眼]を使えるとして、水面歩行の業だけではないんだろう？

正直に話しなさい。隠していた理由も聞かない。お前は年の割に十分に賢い子だ。

里の者の目に着くのが嫌だつたんだろ？安心しろ、お前は俺の息子だ、強くて当然だ」

「来到了！」“俺の息子”発言！原作サスケが言つて欲しくてたまらなかつた言葉を聞いちゃいました！

原作では後ろ姿しか見れなかつたけど、生で見ると中々に朗らかな顔をしていた。

「ええっと……、火遁は豪火球の術と豪龍火の術かな……？
他にも水遁にも適性はあったから……、鉄砲玉の術を書物から見た
ぐらいかな？」

写輪眼でも一度見ないと術を盗めないし、写輪眼は人前で使わなか
つたからそれぐらいだよ」

「そ……そつか、豪火球の術だけでなく豪龍火の術も使えるんだな
……さ、流石は俺の子だ」

顔が引き攣つてるよ、父さん！

何？豪龍火の術つてそんなに高等忍術なの？

原作サスケが麒麟を使うために適当に使つてた術だから簡単だと思
つていたよ……。

「そこまで忍術を使えてているんだから、少し早すぎる気もするが
忍者学校に入学するか？」

お前程なら直ぐに上忍にもいけると思つが……」

「父さん、俺はまだ忍者学校に行く気はないよ。
あそこには適年齢の時に入る。出来たら父さんや兄さんに術を教え
てもらいたいんだけど……」

「ふむ……、それは忍者学校に入学しながらでもいいのではないか?」

俺としては直ぐに忍者学校に入学して、早く立派な忍になつて欲しいのだが

「あらあら、母さんからは教えて欲しくないの?」

母さんだって昔は上忍で結構強かつたのよ?」

母さんが[冗談交じりに笑いながら俺に驚愕の事実を伝えてくる。
え……?上忍?・マジ?デスカ?・どんだけ俺ってサラブレッドなんだよ。」

「まあ母さんにも当然教えてもらひな。」

けどね、忍者学校に今入ると周りはみんな年上でしょ?」

俺は学業だけでなく友情や恋愛も楽しみたいの。別にいいでしょ?」

「三歳児の言ひ事じやないと思ひがな……」

「兄さんもこんな感じだったと思ひただけどな……」

「まあいい、お前の気持ちは分かつた。これからはお前に沢山の術

を教えて行く。

「いずれは万華鏡写輪眼も開眼させて、俺を超える忍になつてくれ」

万華鏡写輪眼の単語を出したとき、兄さんの表情が一瞬だけ固まつたのを俺は見逃さなかつた。

もう万華鏡写輪眼の開眼条件に気付いているのかもしれない。

兄さんがどういう思いで行動するかも俺は知つてゐる。

「当然！俺は最強の忍になる忍だからね。父さんも母さんも、それから兄さんも全員超えてやるぞ」

「それでこそ、俺の息子だ」

「あらまあ、サスケに抜かされなによつに私も訓練を再開しようかしら？」

「そうか、俺はお前の兄だからな、俺はお前の越えるべき壁となり続けよつ」

だから「ん、俺は」と言つた。

第一話

サスケ6歳の時

最近、うちは一族の動きが怪しくなってきた。

恐らくクーデターの話が浮上してきているのだ。

俺は最近とてもなく悩んでいた。

俺の能力の”大嘘憑き”は、自分が殺した相手しか生き返らすこと

が出来ない。

まあ自分は誰に殺されても生き返る事が出来るのだが。

あの時の実験は怖かった。結局、自分の心臓をクナイで刺したが、あの時の痛みは恐らく一生忘れる事の出来ないほどだ。顔面をトマトの様に潰された球磨川はどんなに痛みに耐性があるの?つと思つたほどだ。

まあ俺が言いたい事は、両親を生きながらえさせんには、俺が両親を殺さなければならないと言つ事だ。

両親を殺せと言われても、別に後で生き返らす事の出来るなら、別に罪悪感も感じずに出来るだろう。しかし、両親はクーデターの主犯格。本当にうちはが全滅したことでクーデターを諦めるのか?答えは寧ろ逆だろう。復讐を近い、片方がもう片方を殺し、万華鏡

を開眼させて里に復讐を始める可能性も無い事はない。そうなつた場合、里の人間は大量に死に絶え、兄さんが危惧していた戦争が起こる可能性も無くはない。

それでも……育ててくれた両親を守るべきか？

俺は分からない……。原作での兄さんの気持ちがわかつた気がする……。

ちなみに、アカデミーの入学式のイベントの時は、父さんが少し肩に見えたのは内緒だ。

兄さんは流石！って感じだつたけどね。

サスケ8歳の時

俺の気持ちは決まった。俺はひつそりと火影様の執務室へと忍び込む。

中には兄さんと火影様のみがいるはずだ。態々相談役とタンゾウがない時を狙つたのだ。

これを失敗するわけにはいかない。

「しかし、本当にそれだけしか方法がないのかのう？」
儂としてはそんな方法を取りたくないのじやが……。儂にとつて

里の皆は儂の息子の様な者。

民族に関係なく平和にしたいのじゃが……」

「失礼ですが、火影様。うちはをこのままにしておくと、尋常ならざる被害が生まれるでしょう。

そのためには、私がうちはの因縁にケリを付けねばならないのです

「そうか……作戦はいつ行うのじゃ?」

「次の満月の日……。どうか……サスケをお願いします。
あいつだけは……どうか……護つてあげてください……」

「分かった……お主の頼み。この猿飛ヒルゼンが死んでも受け入れ
よし……」

視覚阻害を用いて兄さんの後ろに立っています。

やつぱり俺は決めた。俺は兄さんのように平和を守りたい。

ハーレムと平和!その為に俺は生きる!

原作もある程度は放置、俺は……自分のしたいように生きる!

「…………火影様、イタチ兄さん。少し作戦を変えて欲しいんだけど……」

「「…………」」

二人が一体いつから…………、と言いたげにこちらを見てくるがちょっと無視。

兄さんの驚いた顔は初めて見たかも…………。

「何時から…………いたんだ？」

「最初から、別にこれを父さん達に言つつもりはないよ。
けどね、うちには一族にはクーデターに関わりを持つていらない一般人
や、まだ子供だったり赤ん坊だったりでクーデターを知らない人も
いるはずだよ？俺としてはそこを殺すのはやり過ぎだと思うんだ……」

「…………」

「しかし、一般人でも元忍の者はいる。そいつが戦争を引き起こさ
ないと限らないわけではない。
サスケ……、お前には本当にすまないと思つて……。こんな兄
で済まなかつた……」

兄さんの目に薄らと涙が浮かぶ。

あの能面を張り付けたような兄さんが泣くなんて……。

「いや、サスケの言う通りじゃ。一般人は少し厳しいかもしかんが、子供や赤ん坊を殺すのはやはりやりすぎじゃ。残るのはサスケとコウジの二人のみじゃが……コウジには罪は無い。彼にも生き残つてもうつべきだと僕も思う」

流石火影様！歴代火影の中でも穏健派と言われたのは伊達じゃありませんね！

こちらを見て朗らかに、そして悲しげに笑う火影様に俺は全力で頭を下げた。

やはり、火影様としてはうちはと話し合いで解決したいと思つてゐるのだろう。

けど、それはもう出来ないほどにつちはと木の葉の確執は広がつてしまつてゐる。

「んじや、兄さん。行こつか。後10日も無いけど、最後ぐらいは兄妹らしく遊ばしてくれよ？」

「 そつだな……、最後ぐらい……な

目を瞑り上を向いている兄さんを俺はチャンス!と言わんばかりに懐に隠してあつたチャクラ刀で首を切る。兄さんが切られた事も気付かないほどの勢いで。

「 な、何をしておるのじや！ サスケ！ 」

「 ああ、もう大丈夫ですよ？ ほら？」

「 な、イタチ？ どうこうじや……今は幻術？」

そして”大嘘憑き”で兄さんを生き返らせる。いきなりの自体に兄さんは吃驚しているようだ。

「 今のは俺が作った新術……、いや、禁術ですかね？ 効果は自分が殺した相手、及び自分の蘇生です。怪我も治せますけどね」

「な……なんといふ術じや……。しかし……何故イタチを殺さねばならんかったのじや？」

「それは……いつするためですよ」

俺は万華鏡の開眼条件を満たした。

瞳を万華鏡へと移行させ、目を抉り取る。

兄さんと火影様は驚いて止める事さえ忘れていた。

「……ツグ、ハアハア……これを……兄さんの目に移植してくれ。

その後、兄さんの目を俺に移植する。

これで万華鏡は光を失わずに済む……」

「サスケ……万華鏡の事まで知っていたのか……。分かった。お前の目、大事にさせてもらう。

俺とお前は目で繋がっている。フツ、うちはの忍らしい最期じやないか

俺と兄さんは、火影様の執務室を後にする。

実はマダラの兄弟での相互交換は無理だったみたいだけど、俺達のは何故かいた。

まだ万華鏡を開眼したてで視力が失われていなかつたからか？

その後、俺は虐殺までの10日間を、精一杯両親や兄さんに甘えて過ごした。

「うちは虐殺の時

今日の月は満月。辺りには血が飛び交っている。
恐らく、兄さんが粗方の忍を殺し終えたのだろう。
後はマダラに見つからないように、自分の部屋へと戻るだけ。

「お前が……うちはサスケが。お前の実力……見せてもらおうか……？」

遭遇しちゃいました……マダラさんと……勝つ方法思いうかばねえよ……。

殺す方法ならばどうとでもあるんだが、ビックリ……？

「来ないのなら、うちから行かせてもいい」

「チツ、ヤケクソだよ畜生、火遁・火龍炎弾！」

素早く写輪眼を開眼させ、火遁の術を発動し、チャクラで練られた炎をマダラに向かって放つ。

この術は、使用した後も自由に操作可能なため、俺が最も使いやすいと思っている術だ。

その炎が、マダラに向かって飛んでいくが、案の定炎はマダラを通り過ぎる。

「ただの炎では俺に勝つ事は出来ん。今度は体術勝負といこうか」

マダラが俺に向かってキックやパンチを織り交ぜて攻撃していく。これは好都合！と思い、オートバイロットを使い、全ての攻撃を避ける。

そして、僅かな隙を見せ、マダラが俺の腹へとパンチを当たした瞬間に、ベクトル操作を使いマダラの腹を本気で蹴り飛ばす。やはり、原作通り相手に攻撃を当てる時だけは実体化をしなければならないようだ。

「ハツ、これで少しは効いただろ……流石にこれでしばらくは起き上がれないだろ…… 4tトラックにぶつかったぐらいの衝撃を与えたからな…… これで起き上がれりゃあ…… つてマジかよ……」

コラコラとした怪しげな動きでマダラが立ち上がる。
幾らマダラでもベクトルを操作した渾身の一撃を喰らってはタダでは済まない様だ。

「その年にしてその体術、忍術、洞察力。全てにおいて卓越しているな……。

流石はあいつの弟と言つたところか?まあいい……、今頃は貴様の両親も殺されているだろう。

またお前とは会つ時が来るかもしけんな……」

兄さんは俺の事をマダラに話さなかつたみたいだな。
まあここは驚いたふりをしておくか……。

「父さんと母さんが!/?兄さんは大丈夫なのか!/?それにお前は誰なんだ!」

「俺の名前はマダラ……お前の兄は……クックク、自分の田で確かめるといこり」

マダラが瞬身の術で立ち去った後、俺は自分の家に向かった。誰が見ているかもわからないので、慌てた振りを装いながら。

そして、自分の家に着いた時、父さんと母さんは既に物言わぬ屍になつており、兄さんは自分に背を向けて静かに佇んでいた。

「兄さん……じばりくはお別れだね……」

「……そうだな……サスケ……また会おう……」

それだけを言い残し兄さんは顔も見せずにその場を立ち去った。俺も、顔が酷く汚れていたので兄さんと顔を見合わせなくて良かつたかもしぬ。

葬式の当日

今日はうちの葬式の日。

気候はどうようとした壘つ壁で、俺の心を彩つてこようがついた。

「どうしてだよ……ひーじりじト……母さんと父さんが殺されなきやならなかつたんだよ…」

俺の目の前には一人の泣いている少年がいた。

名前は”ひのは”ウジ”俺以外の唯一の生き残りだ。

「サスケ……俺は絶対に復讐する……母さんや父さんを殺したイタチに……。

お前もだよな？許せないよな？唯の自分の器を図るためだけにみんな殺されたなんて……」

「悪いな……、俺は復讐なんて無駄な事はしない。
したいんなら一人でやつて。俺は自分がやりたいように生きる」

「復讐が……無駄な事……？ふざけるなよ！罪を犯した奴を殺すのは正当な裁きだろ！」

いつの間にか、辺りの人々がこちらを注視している。
「ウジがあまりの大声で怒鳴りたてているせいだろう。

「俺からしたら何も知らないお前は唯踊らされている道化に過ぎん

……」

「やつかよ！ならお前と話す事なんざねえよ！」

俺は、最後の生き残りのつちはとも決別した。

そして、俺はこちらに顔を向けている火影様の元へと向かった。

「火影様、私はまだ未熟な者です。故に、アカデミーを卒業するまでの間だけで構いませんので、どうか私を保護してくれませんでしょうか？」

「元よりそのつもりじゃ。木の葉の忍びは皆、儂の息子。」ウジも

「ちりへ来なれー」

「嫌だ！俺はそんな軟弱者などと一緒にいない！俺は絶対に復讐するー！」

それだけを言い残し、コウジはその場を去っていく。
そして、悲しそうな表情をした火影様と俺も、周囲の参列客がいなくなつた後、その場を去つた。

サスケ10歳の時

「なあなあ、ヒルゼン。俺さあ、少し任務やつて自分の実力試してみたいんだけど良い？」

「はあ……お前のその口調はどうにかならんのか？この家に来てから数日もしたらそんな口調になりあつて……、お前はどれほど猫を被つているんじや……」

「まあいいじゃん。適当なランク任務ちょーだい。俺の実力ならヒルゼンも知ってるし、別にいいだろ？

木の葉丸も最近は真面目に忍術を練習してるみたいだし、俺がいな

くても昔みたいに泣かないだろ?「

なんやかんやで一年たつたサスケです。え? キンクリしそぎ? そういうメタな発言は無しでお願いしたいんですけど……。

最近メキメキと忍術を学んでいます。流石はプロフェッサーと呼ばれるだけあり、一人で覚え切れるのか? と言いたくなるような術の量を覚えており、本当に危険な術以外は全て教わった。

”完成” まじパネエっす。一見でパーフェクトとか、身稽古かよ。つて感じだし。

よく考えたら超能力か異常+過負荷のどっちか一方でも十分に行けたかもしれないな。

「確かに……お前は異常なまでに術を会得し、儂の弟子としても最强……いや、今の儂が戦つてもお前には負けるじゃろう。そこで……じゃ、お前さんにSランクの任務を課そうと思つていい。ただし! 飛雷神の術式を刻んだクナイをここに置いていき、危なくなつた時はここに帰つてくるのじや。よいな?」

「……俺つて死んでも生き返るんだけどね。それに”今の儂”ってのは昔なら勝てたつて事かな?微妙なところで張りあうなんて火影様

も人だと実感したなー」

「任務を渡さんぞ……？」

「すいませんでした！」

これが日本の伝統技能、ジャンピングDO GE NA。
滑り込むように相手の下にもぐりこみ、頭を地面に完全にくつ付ける！

これを見ればどんなに硬い奴でも、ドン引いて思わず許してくれる
という戦法だ！

「う……うむ。

ではお主に任務を言い渡す。任務は戦闘への介入じゃ。

同盟国の砂隠れの里で小さな小競り合いが起きているらしい。

現在砂は諸事情で忙しいようで、こちらへ依頼が来た。

少數らしいが、血縁限界も確認されておる。ここにきてかかれ

「了解しました、火影様。では行つて参ります

砂隠れか……前にマーキングはしてあるな……、直ぐに着くか。

それにしても血継限界か……試してみたい事があるんだよな。
あれが成功すれば、俺は忍としても最強の忍になれる！

砂隠れの里付近の戦場

「どうやら……この戦闘は血継限界の数人が起こしたクーデターみたいなもんみたいだな。

こういう場合は頭を潰せば戦闘は終わるって相場が決まってるんだよな……」

初めての任務でテンション上がりまくりです。

しかもマダラ戦以後の初めての命を懸けた戦いですし、俺が考案した新術の実験台にでもなつてもらうかね……。まあ俺は実際問題死なないんで命なんて懸けてないけどね

「やあ……不吉を…届けに来たぜ」

決まつたあ！一回は言つてみたかったこのセリフ！
前世でいつたらただの厨二だけど、この世界なら唯の自信過剰です。
あれ？対して変わってない……？

「な、何なんだ、てめえは！何処の者だ！？」

「何処の……と聞かれますと木の葉の……忍見面いですかね？」

よく考えたら下忍でさえない俺に任務を託して大丈夫なのか？
まあ各一族の長は俺がヒルゼンの弟子で、実力が計り知れない事も
知られていますし構わないか。

「まあ、深い事は考えずに一発戦おうぜ」

「ハツ、貴様を負かした後じつへつと吐かしてやるよーこべぞー！
フミ、トーノー！」

「おおー！俺達の血縁限界の強さを思い知りじいやねー！」

「落り付いてくださいよ、そんなんじやあ勝てる者も勝てませうよ

？」

一体三、普通に考えれば圧倒的に不利な状況。

全員が各自の構えで相手を睨みつける。最初に動いたのは、フミと呼ばれた青年。

「我らの最速最強の迅遁の前には貴様は着いてくる事をえ出来ねえ！大人しく俺らにやられちまえよ！」

本人曰く、彼らは迅遁使いらしい。

劇場版に出てたような気がする……まあどうでもいいんだけど、そこまで早くないよな……。

「遅い！まずは一人！血遁・血桜……」

それなりに早いスピード（写輪眼を使ってみれば普通に遅いスピード）で迫り、クナイを俺に突き刺そうとした忍の腕をつかみ、相手の血液をベクトル操作で逆流させる。

いくらなんでも相手に触れただけで相手を破裂させたらあまりにも怪しまれるので、普段は”血遁”と自分で呼んでいる。実際、自分オリジナルで血を使う水遁の術も開発したから完全に嘘……つてい

う訳でもない。

「いけね、試したい」とあるのに使うの忘れてたよ……。

「何……その眼……うちはか！例え最強の一族であつたとしても、フミを殺した貴様だけは絶対に殺す！いくぞ、トーノ！」

「ええ、フミ……あなたの仇……必ず取らせていきます」

一人は目に見えて怒り、もう一人は穏やかそうに見えるが、その目を見る限りでは酷く怒っているように感じられる。まあだからと黙つてなんだ？って話なんだが……。

周囲を一人が光速で移動している間に、俺は新たな印を結ぶ。

「生き残りは一人でいいさ……一人には……死んでもらう。血遁・血千本」

「はつ！何も発動してねえじゃねえか！単なるこけ……グッ……何だと？」

「//フキー。一体……何処から……」

名前判明、//フキーって言つらじこです。

まあどうでもいいんだけどね。ちなみに、血千本の発動場所は//ミと呼ばれた男の死体から。

血はチャクラの伝導率が異常に高いので、チャクラを大量に練りこめばかなりの強度と柔軟性を持つかなり危険な武器になるのだ。

最後の一人のトーノとか言つ忍の元へと瞬間移動し、腹を思いつきり蹴りつけ、その後にブローを決め、//ミと//フキーのしたいから血で作った千本を飛ばし殺す。

「殺したってのにあんまり感慨が浮かばないな……。

まあ喜ぶとすれば、予想は的中していたから疾遁が使えるように成つたぐらいか？」

ちなみに、俺の予想とは本当に血継限界が血によつて伝承されているのか？と言つものだ。

俺の予想では、血継限界の忍は本能レベルで術の使い方を覚えていのだと思つ。

ならば、どのようにして使つてゐるのか？と言つ事だ。

俺の予想では、電気信号が関係しているのではないか？と思い、さつきの相手に”理不尽な重税”を使ったのだ。結果は成功。俺は相手の血継限界を奪うことに成功したのだった。

俺はホクホク顔で里に帰還し、ヒルゼンから報酬をもらい、次の日を工口本を読んで一日が終わり。

ヒルゼンに物凄く呆れた顔をされた事をここに記しておぐ……。

第三話（後書き）

ここでハーレム要員が出ると思った人……残念です……。サスケはハーレム願望が有りますが、ハーレムになりません！

ちなみに、この小説を書いたのは気紛れ。

更新希望が多かつたら書き続けるかもしねり。

中々に書いてて楽しい小説だったのでww

「よし、次！ うちはサスケ！」

「あ～、はいはい、分身の術～」

「……つ、なんでそんなにやる氣のない分身でそんなバカみたいな人数に分身できるのかを先生は知りたいんだけどなあ……？」

「ハハハ、まあ出来てるんですけど良いじゃないですかイルカ先生。うちはサスケ、合格！」

「ありがとうございますー、きやーうれしー（棒読み）」

なんやかんやでアカデミーを卒業した。

すつじくやる気がなかつたから適当に分身したら数百人単位の分身が出てきた。

何か事前に予測されてたっぽくて俺だけ他のみんなとは違う部屋で試験受けたからなー、なんて考えつつ、俺はシカマルの元へと行く。それについてミズキ先生の猫被りすごいなー、とか思いながら……。

「ちーつす、シカマルは試験に合格したか~?」

「ん? まあな。流石にアレぐら~いの術は出来て当然だろ。で、お前は今回はどんな規格外の事をしたんだ?」

「おいおい、それだと俺が毎回滅茶苦茶なことばっかりやつてるみたいじやないか。

「一体、何時、俺が、問題行動を、したんだよ?」

「障害物を避けて手裏剣を投げるときに障害物を貫いて的に当てるたり。

変化の術を使う時に印を結ぶのが面倒とか言つ理由で全員に瞳術で幻術掛けたり。

火影様が視察に来た時に殺す氣のトラップを掛けたり……、むしろ問題行為以外を探すのが大変だよ

「まあ幻術に気付いたシカマルも相当だと思つけどね、まあ今回は百人単位で分身しただけだよ」

「それを”だけ”で済ませるお前が怖えよ。それにしてもいいのか? ハウジの奴がお前の事をすっげえ睨んでんぞ?」

「ハハハッ！弱者に興味はないのだよ、ワトソン君。んじゃ、俺はもう帰るからね～、また遊びましょ」

般若の如き形相で睨んでいるコウジを無視し、俺はアカデミーを後にする。

正確にはナルトの多重影分身を「コピー」する準備をするのが。

ちなみに、今の俺の服装は第一期のサスケの服装だ。

和服かっこいいよね！和服！一部の先生には胸が肌跳てるとかの理由で怒られたけど、ヒルゼンに頼んでOKにしてもらつたぜHAH

A
H
A
!
!

これで女子もイチコロ とか思つてたんだけど、悲しきかな。
あまりにも授業の成績が良すぎて格好いい（自惚れではない）俺は
高嶺の花的ポジションに追いやられてしまい、全然告白とかがない
のである。むしろ、サスケ君は無理でもコウジ君なら……的な感じ
でコウジがモテモテに。……リア充は死んでくれ。

火影宅・火影と水晶閲覧中

「なあ、ヒルゼン。ナルトってさ、里を壊滅にまで追い込んだ九尾の人柱力でもあるけどさ、里を救つた英雄の四代目火影、波風ミナトの息子でもあるんだよな？やつぱりさ、その事実を公表したほうがナルトの為にも良くないか？」

「……お前なら知つていても可笑しくはないか。……。ナルトがミナトの息子なのは機密事項だつたんじゃがな。確かに、儂も今はそう思つていた。じゃがのう、儂はナルトを普通の子供として見ておいて欲しかつたのじゃよ。それが結局、九尾の人柱力だと言う事だけがバレ。里の皆から迫害された。儂は間違つた選択ばかりしてあるのかもしだれんのう……。あの時の大蛇丸を逃した時もしかり、うちはを根絶やしにした時もしかり……」

「確かにミスも多かつたかもしだれねえな。

けどさ、里の皆から慕われてるのも事実だろ？今、木の葉の里が平和なのもあんたのおかげだし、人間だれしもミスはある。それに、大蛇丸の事は知らねえけどさ。うちはは自業自得なんだからヒルゼンの気にする事じやねえよ。んじや、俺はもう寝るわ

ナルトの多重影分身を覚え、これから修行が効率よくなると思つた時。

俺はヒルゼンとこんま話をした。原作隔離が怖いから基本的にアカデミーでは接触しなかつたけど、少しごらいは話し相手になつてあげたらよかつたかもな。

結局俺はどの班になるんだ？……？と、悩みながら、俺はぐつすりと眠つた。

班分けの時

「なあなあ、シカマル。お前は誰と一緒に班になりたい？」

「んん~、お前とチョウジかな？そのメンツなら楽できそうだしお前がいたら全部の任務を一瞬で終わらせる気がするしな

「まあ強ち間違つても無いんだが、チョウジは何処にいるんだ？まさかの遅刻か？つて……向こうで菓子をバリバリ喰つてるだけかよ。

んじゃ、俺は少し移動しどくから、一緒に班になつたりよろしくな

誰になるかな、誰になるかな？タタタタタタタタタタタタタタ
まあヒルゼンは俺の実力を知つてゐるし、普通に考えたらカカシ班か？

てなると「ウジは？俺としたらナルト・サスケ・サクラ・俺つていう展開が望ましいんだが。

あ、「ウジがナルトとキスした……」。

つてことはサクラは「ウジが好きなのか……、なんか取られた気分になるな。

「班は力のバランスが均等になる様にこつちで決めた」

「その言葉に反論が飛び交うが普通だろ？」

「雑魚い奴同士が組んだらそれこそ田も当てられないぞ。」

忍つてのは命を奪いあつ者だつていう自覚が足りないのかねえ？
この子供たちは九尾襲撃も知らない奴らだしな。

強いて言うなら大虐殺を受けた俺と「ウジぐら」にじやないのか？

「じゃ、次は七班。うずまきナルト・春野サクラ・うちは「ウジ。
それと、特例としてうちはサスケだ」

「イルカ先生！…よりにゆよつて優秀なこの俺が、何でこいつと同じ班なんだつてばよ！…」

「お前はあまりにも成績が悪すぎるから、成績一位と一位のサスケと「ウジを付けてようやく班の力を均等に出来るんだ。分かつたら

静かにしろ！」

イルカ先生……それ逆効果。

まあ案の定ナルトは大騒ぎ。多分この後コウジに変化でもしてサクラにキスするんだろうと予想。

まあサクラはあまり好きじゃないのでスルーして家に帰る。カカシに仕掛ける罠でも考えてから寝よ。

ナルトの家にて

「ここがナルトの家ねえ……」

「そうだ」

ナルトの家に絶賛不法侵入中のカカシと火影。

上忍の中でも最強の部類に入るカカシと、火影の座に座っているヒルゼンが不法侵入とは、中々に見られる物でもないのである。

「まぬけな奴だがお前に見張らせるのが一番だ。お前は鼻がきく。

それから……お前が受け持つ班には「うちばが一人いる」

「……一人と言いますと……あのサスケもいる訳ですか」

「ああ、どうやってかは知らんが他の忍の血継限界をもコピーリ、Sランク任務においても無傷で生還したりしておる。まあ、安心な事にサスケには野心も無ければ復讐心も無い。そういう点においては安心じゃよ。まあ強いて汚点を言うなら性に異常なまでに執着を持つていてる気がするがのう……。まあ健闘を祈つておく」

「まあ私も彼は気になりますしね。それにしても問題児ばかりですね。
なんで私がこんな班を……。はあ、まあ頑張りますよ」

何気に火影からの信頼を得ているサスケだった。

サスケの異常な性への執着も見抜かれているようだったが……。

第七班顔合わせの時

ウツハツハ！今日、俺は、究極の、罠を、持ってきた！

昨日寝る間を惜しんで口寄せの術式を書き込んだ巻物を大量に作つ

たのだ。

毒は入れてはいないが、テンテンが使っていた忍具を遥かに超える出来だと思つ！

「ナルト、じつとしきなせこよー！」

「何でオレ達七班の先生だけこんなに来んのが遅せーんだつたばよオー！」

そーだ、ニシシシ。遅刻してくる奴がわりーんだよ

「つたぐ、モーーー私！知らないからねー！」

「フン、上忍がそんなベタなブービートラップに引っかかるかよ」

「そーだぞ、ナルト。隠つてのはこれぐらいやるんだよ。
ちょっと俺のやる事を見とけよ？」

俺が持つてきた巻物のうち、一つを床に敷き、地面と同じ柄の布をその上に被す。そして、避けると思われ位置に偽物の巻物をおく。だが、相手は「ペー忍者はたけカカシと恐れられるほど忍。絶対に避ける。ならば、その巻物の四方に床に偽装した巻物を仕掛け
る。

「すまんな……ツー！」

カカシが来た！先ずは手始めに四方からのクナイの飛来。普通の巻物は開いた場所に出てくるだけだが、飛雷神の術を応用し、相手の四方に発生させて相手に向かつて飛んでいく。カカシは驚きながらも上に飛びが、そこには千本が大量に飛んでくる、そこにはあえて少しの隙間を作つてある。そして案の定カカシはそこを抜けて来、あらかじめセットしておいたダミーの巻物の上に落ちそつになる。しかし、それを全身をひねつて何とか巻物の横に着地する。しかし、そうは問屋がおろさない。最後にしかけておいた巻物が開き、全身に雷が通る。全身に雷が流れて身体が痺れている間に、とてつもなく強烈なにおいが流れ、カカシの体臭を酷いものにする。

フジムナナオオカメムシと言つ、この世界でも最も臭いと言われている虫の体液を濃縮した物をスプレー状にした物をさつきは吹きかけたのだ。この臭いは直ぐに取れるのだが、その臭いは異常なまでに臭く、もと暗部のカカシでさえ悶絶するほどであった。

「「「…………（やつすぎ…………）」「」」

「……ツプ！ハハハツハツハ！……臭えーーやつばーー……フウ、丈夫ですか？カカシ先生。

実は、俺は必死に止めたんですけどナルトの奴が……、すいません

……」

「んーー、はつきり言つて、お前の第一印象は……死ね」

大人げなくサスケに暴言をはいた力カシ。そのあと、若干力カシに怒られたような気もするが、あまりにも臭い為に屋外へと移動し、お互に自己紹介をする事になった。

「んじゃ、自己紹介でもしてもらおうか。好きな物でも嫌いな物でも、将来の夢とか趣味とか……。

まーそんな感じで自由にやつてくれ。まずは俺から行くか。オレは「はたけカカシ」って名だ。好き嫌いをお前達に教えるつもりはないが……強いて言つならうちはサスケが嫌いになつたな。将来の夢つて言われてもなあ……、まあ趣味はいろいろだ」

「ねえ……結局わかつたの……名前だけじゃない……？」

「まずはオレからー名前はうづまきナルト！好きな物はカツチラーメン！もっと好きなのはイルカ先生においこつてもらつた一樂のラーメン！嫌いなものはお湯を入れてからの三分間。将来の夢は……火影を超す！……ンでもつて、里の奴ら全員にオレの存在を認めさせてやるんだ！！」

「名はうちはコウジ、嫌いなものなら沢山あるが、好きな物は別にない。それから……夢なんて言葉で終わらす気はないが野望はある！一族の復興と……ある男を、必ず……殺すことだ」

「私は春野サクラ。好きな者はあ……つてゆーか……好きな人は……。えーとお……将来の夢も言っちゃおうかなあ……キヤーー！……嫌いなものは、ナルトです」

「最後は俺か？うちはサスケ。好きなのは女と兄さん、嫌いなものは、仲間を見捨てる屑だ。将来の夢は上忍になつて美人の嫁をもらいたいな。復讐なんて厨二臭い事はするつもりはない。それから一つ先生以外に言つとすれば……”忍をナメるな。敵は迷わず殺せ。一時の迷いが仲間を殺す”だな」

カカシは好感、コウジは敵意、サクラとナルトは驚き……かな？Sランク任務、俺はずつと一人でやつていたが、もし、足手まといがいればどうなるかは分からぬ。

それに、第七班には再不斬というバケモンと鬪つう任務が有るんだ。覚悟を今から持たしておくにこしたことはない。

「まあ自己紹介はここまでだが、明日にはある任務についてもうひとつ、
サバイバル演習だ」

他の三人は何もわかつてないみたいだが、難易度だけでいうならこの任務はA～Bぐらいはある気がする。

「相手はオレだが、ただの演習じゃない。卒業生28名中、下忍と認められるのは最大でも十名。残りは全員アカデミーに戻される、この演習は脱落率60パーセント以上の超難関試験だ、とにかく、明日は演習場でお前達の合否を判断する。忍具一式も持つてこい。それと朝食は抜いとけ……吐くぞ、解散！」

さて……どうするべきか？

わざと負けた振りをする？ 強引に四人で協力する？ 一気に圧倒する？ まあ……出たとこ勝負でどうにでもなるか？

第四話（後書き）

更新頑張ります。
ネギまの息抜き程度に書いていますんで、極度の期待はしないでく
れると有り難いです。

第五話（前書き）

サスケは基本的に実力を隠しています。

まあ隠しても最強のレベルなんですが、けどね。www

光化 静翔 だけでも普通の人間は勝てんよ。www

大嘘憑きなんてどう戦えばいいんだよ。wwwってレベルですしね。www

サバイバル演習の時

「鈴は一つ。本来なら一人は確實に不合格なんだが、この班は四人いるからな。

残念なことに一人は確實にアカデミーに戻つてもらひ、んじや、一時になつたら終了だ」

原作通り、ナルトは単独プレイ、「ウジは全員を足手纏い扱い、サクラはナルト放置でコウジを探しまくると言つ荒業。それにしても、一時間原作よりも長いのは俺のせいか？

「んじや、お前も出てきなよ、サスケ」

「あ、やつぱりバレてました？流石は「ペー忍者の力カシです、ねつ！」

言葉と同時にカカシに足払いを掛ける。
それをカカシは苦も無く躰し、逆にパンチを放つてくれる。

12歳で上忍になつた相手とともに体術をやるのは愚策の為、”光化静翔”を使い力カシを一瞬にして蹴り飛ばす。いくら優れた人間でも、光の速さで迫りくる蹴りを避ける事は不可能。

あり得ない速度で放たれた蹴りに驚愕しつつも、力カシはサスケが並の相手ではないと悟り写輪眼を発動させ、サスケに話しかける。

「流石はうちはの鬼才と言つたところか、正直なところ舐めていたよ。

ここからは忍らしく忍術合戦とでもいひつじやないか

「写輪眼……、俺も使わせてもらいますね。行くぞ!」

写輪眼同士の戦い、今を生きる写輪眼の使い手は六人。滅多にお目にかかる事の出来ない試合。それを見て、コウジは驚愕していた。

「あれは……写輪眼!? 何故力カシが使える……!? それにサスケの奴はもう開眼してたのか……」

「なあなあ、サクラちゃん! シヤリンガンってなんなのさ?」

「黙れ、ウスラトン力チ。

「写輪眼つてのはうちは一族の中でも優れた者にのみ開眼する眼だ」

「え？ けどさ、けどさ！ サスケはともかくカカシ先生はうちはじやないってばよ？」

ナルトと「ウジは話しこんでいる間にも試合は進んでいく。
優れた忍同士での勝負の場合、普通は印を結ぶスピードが超高速となるために見る事が出来ない。

しかし、彼らには写輪眼と言う優れた洞察眼を持つた瞳が有る為、術を同じ術で相殺する事が出来る。

「水遁・大瀑布の術！」

「くつ、水遁・大瀑布の術！」

しかし、幾ら同じ術を使えるとしても、術には相性が有る。
サスケの適正は火・水・雷だが、カカシの適性は雷・土。そのため、水遁系の術の打ち合いではサスケに幾らかの分がある為、サスケの水流がカカシの水を逆に飲み込みカカシを襲う。

「まだだ！雷遁・地走り！」

そして、忘れてもらつては困るのは、サスケに備わつたチート能力の数々である。
今回使うのは”電撃使い”。これによつて一気に水を電気分解させる。

これは相手がカカシだからなせる術で、もしカカシではなく並の上忍ならば水とともに感電死、天へと召されてしまつたことだらう。

「甘いな、サスケ。確かにお前は並の上忍よりも強い。
だが……詰めが甘いな。ま、年の割には充分見所があるよ

いつの間にか後ろに回り込んでいたカカシによつてクナイを首に添えられる。

しかし、サスケはクナイを突き付けられたといつのに不敵に笑い力カシに告げた。

「いいや、俺は終わつていなさい

「ツー、影分身か！」

カカシがクナイを向けていたのはサスケの影分身。水遁・大瀑布の術を発動させた時に密かに入れ替わっていたのである。

「終わりですよ、火遁・朧火……」

サスケが作ったオリジナル忍術の一つ、朧火。火力としては最低レベル。下忍でもう少しいけるのでは？？といふレベル。

この術の一番の長所は不可視。

本来、火遁の術、否、全ての術は一部を除き体の何処から放出される。

しかし、この術は自分の任意の場所に炎を発生させる事が出来る。つまり、大量の水が電気によつて分解されたことにより発生した水素と酸素が一気に化合するのである。

その勢いは計り知れなく、カカシは為す術も無く地面に倒れていた。そのあと、鈴を取ろうとカカシの元へと近付くが、当然の如くあの熱量にただの金属が耐えきれるはずがなく、その場に立ちつくすサスケの姿だけがあつたそつだ……。

三時間後

「あ、起きましたか？先生？何かすいません、やりますがちやつたみたいで」「

「ん……？サスケか。それにしても驚いたよ。火影様から強いとは聞いていたけどあそこまで強いとはね。他の三人はどうした？」

「ああ、あいつらなら明日と同じ時間に集合とだけ伝えて帰らしましたよ。で、どうあるんですか？あの演習の本来の目的はチームワークの確認。全員が不達成で俺に至つては正攻法で先生に勝つやつたんだけど……。」

「やつぱり気が付いてたのか。まあお前に至つては合格だよ。

あの任務の本質にも気付いていたし、実力も申し分なし。というより、有り過ぎるぐらいだ。

まだあるんだろ？奥の手が……噂は聞いているよ、”六道仙人の再来”という異名が付いた理由……ありとあらゆる血継限界を使うつていうね」

真剣な眼差しでサスケを睨む。

絶対にあり得ない事、それを成し得たと言われているサスケは十分に危険である。

いくら火影様が安全と言つても、大蛇丸の例もあり完全に信用するのは少し厳しい。

なぜならば、もしサスケが他里に抜けたとすれば、その里はあらゆる血継限界のサンプルを手に入れた事と同様なのだから。

「まあ使えるな。やり方さえ分かれば……誰にでもできるかもしけんが。
まあやれば十中八九死ぬと思うけどな……。まあ気にする事はないんだ。

明日、俺は休むからな。ナルトは……大丈夫だと思つがコウジには気を付けておいてくれ。

あいつは復讐を柱にして戦つている。もしそれが崩れてしまえば……わかるだろ？」

「お前に言われなくても分かっているさ。俺の仲間は絶対に欠けさせやしない。」

お前方が強くても、任務では俺に従ってくれよ?」

翌日

「さてと……遊郭にでも遊びに行くか。この前はヒルゼンに見つかったからな。しかしとて健全な十一児時なんだよ。ずっと女と触れずにいたら干からびて死んでしまうぜ」

「ほお、それは良い事を聞いたことじや。」

「どれ? 一度干からびてみてはどう? いや……?」

「ヒ……ヒルゼン……」

第五話（後書き）

今回は短め。

つてか”ネギま”の新作を書きたくなつた。

気が向いたら書くかもしれない。

ちなみに、主人公は微最強系の予定。

「ん……んん……、はあ、朝……かな?」

里の中心部に建てられた自分専用の家で目が覚める。此処は”お金もあるんだし一人暮らしした方が良くね?”などというサスケの浅はかな考えでついこの前に建てられた家である。ちなみに、部屋は基本的にモノクロチックで、大体の家具はサスケの自作だつたりする。

「今日は……、あいつらの追試験だつたか?コウジは原作サスケより性格悪い気がするしなあ……。あいつらきちんとやれてんのか?まあ俺のせいつてのもあるかもしれないけど……」

昨日あれだけの戦いを見せつけられたのだ。コウジとしては負けてたまるか!的な展開でナルトに弁当を上げずに黙々と体力を回復しよつとしてもおかしくない。

まあ分からぬものはいくら考えても仕方がないので、部屋を出てあたりを散策する。
今は昼時だし誰か見つかればいいんだがな……。

「あ～？紅さんとアスマじゃないですか～、こんな所でどうしたんです？って聞くまでも無いですね、御邪魔虫は帰らしてもううんでもっかりホテルまでエスコートしてあげてくださいね～」

「お～、待てコラ。別にそんなんじゃねえよ。それよりお前はどうしてここにいるんだ？」

第七班はもう一回テストをするつてカカシの奴が言つてたぞ？「

街を練り歩いていたらアスマと紅さんにエンカウンタしました。

えつと、 、 、 盛れまに謝らなければならない事があります。

先日の投稿……アレつて不完全な下書きを投稿しちゃったんですよ
ね（笑）

まだ書く内容があるのに ｗｗ

けど、何故か気付くと田刊ランキング33位。
これつて読者様に失礼じゃね？って思いましたので此処で謝罪をせ
ていただきます。

本当にすいませんでしたm()m

只今絶賛スランプ中（笑）なので続きが何時になるかは分かりませ
ん。

もしかしたら削除して新作を書くかもしません（新作は一話のみ
執筆終了）

そんなダメダメな作者ですが、どうか見捨てずに頂きたいです。

まず、長期間も更新も感想返しもせずに放置してすいませんでした
OTN

最近クラフやら勉強やらスランプやらで書く気が一切起きなかつた
んです。

なので、中途半端に更新中にするものあれなんで、
全て完結に変えて、今書いてる作品は一旦凍結します。

更新の再開は微妙です。

僕の親父は～と英國紳士の弟～に至つては文章能力が「ミ麗。
特に後者に至つては文章としても成立してなくね？つてレベルの残
念さですので、もしかしたら削除するかもしません。

多分続きを書くとすれば、サスケにひょーい！～ですね。
自分でいつのもアレですが、一番文章が整つてていると思いますんで。

こんな風にかなり自分勝手な作者でいいません。
何ヶ月も放置してこれは酷いと自覚していますが、作者の完全な力
不足です。

もし、新作を書く事が有れば、生温かい田で見守つてください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0371r/>

サスケにひょーい!!

2011年11月6日16時33分発行